

4月から、器質性月経困難症に対して 婦人科特定疾患医学管理料が算定されることになりました

院長 村口喜代

月経は女性にとってはとても身近な、日常的な出来事です。月経のたびに鎮痛剤を手放せない方もたくさんおります。全国的調査では約8割の女性が月経痛を経験しており、うち約3割の女性は月経の度にたいへんな苦痛を経験されており、医学的介入が必要であるとの結果でした。

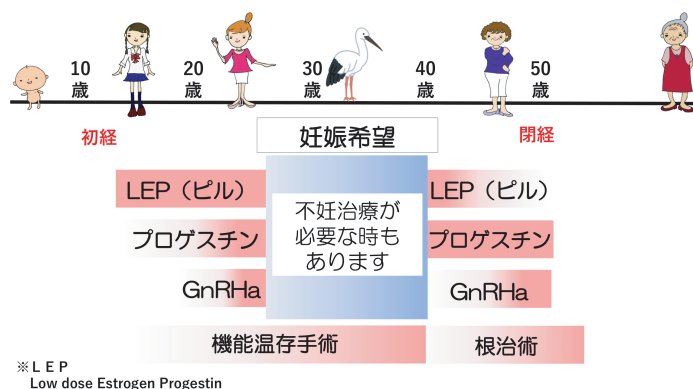
日常生活に支障が生じるほど、強い苦痛を伴う月経を「月経困難症」と診断します。それは月経のしくみに起因する「機能性」と子宮内膜症や子宮筋腫、子宮腺筋症などの疾患に起因する「器質性」に分類されます。前者は月経血を排出するために分泌されるプロスタグランジンによって引き起こされます。後者は其々の疾患に対応した治療が必要となり、今回の婦人科特定疾患医学管理はそのためのものです。内科領域での高血圧症や糖尿病などの慢性疾患の管理と同様に、器質性月経困難症は婦人科領域の慢性疾患として長期的に対処・管理していかなければなりません。

器質性月経困難症に対して医学的介入が必要な理由

直接的には本人自身の苦痛を和らげ、生活の質を改善することは言うまでもありませんが、とても重要なのは、希望した時に妊娠できる、産める性としての女性のからだを守っていかなければならないからです。私事です、私は医師になって直ぐに結婚し、20代で長女、長男を産みました。妊娠できないなんて考えたことはありませんでした。しかしながら昨今は女性のライフスタイルが大きく変わりました。女性が働きながら生きていくことが普通のこと、一般的な社会になりました。女性の平均初婚年齢は29.6歳、第1子出産年齢は30歳を超え、晩婚化、晩産化が進んでいます。初経以来月経を繰り返してきたことで、子宮内膜症、子宮筋腫などの疾患が進行し、不妊症になるかもしれません。昨今生殖医療は身近な話題であり、2017年には16人に1人が体外受精児で出生しており、増加の一途を辿っています。そうした状況を抜本的に改善していくためには、医療の介入が不可欠です。さらにこうした疾患は妊娠・出産の有無にかかわらず、女性が生殖の負担がなくなる閉経まで、時にはそれ以降も診ていかなければなりません。

医学的介入の実際とは

疾患に起因する月経困難症、過多月経などの改善、病状の進行を抑えるために、LEP（ピル）やプロゲステンのホルモン治療やGnRHa療法を行います。一般的には20、30代にはLEPを、40代以降はプロゲステンを使用します。必要によっては、機能温存手術をすることもあります。最終的に根治手術が必要な場合もあります。



※LEP Low dose Estrogen Progestin

婦人科特定疾患医学管理料の算定にあたって

産婦人科医として定期的な医学管理が評価されるという今回の改訂を歓迎しています。医師として慢心することなく、継続的で質の高い医療を提供することに心がけてまいります。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

青天の霹靂 ～がん闘病記～

仙台市立病院名誉院長 東岩井 久 先生



4月1日に仙台市立病院で胆嚢がんの手術を受けた。前立腺肥大のため残尿が多く尿路系の異常があるのではないかと腹部の超音波検査の指示を受けたところ、尿路ではなく胆嚢頸部に腫瘍が発見されたのが端緒だった。2週間の間に消化器内科で各種のX線検査・消化器の内視鏡検査が行われ、手術可能な胆嚢の早期腺がんと宣告された。多数の婦人科がんの治療の経験のある自分もがん患者になったかと、まさに青天の霹靂と思った。

折からのコロナ騒動の最中であるにもかかわらず、診断から1週間で治療を受けることになった。家人と一緒に受けた消化器外科での術前の説明では、「消化器内科では早期がんと言われたが、進行がんであり、根治のためにはリンパ節郭清ならびに脾頭部の切除も必要かもしれない」と言われた。術後は、ICU入院が3日ほど必要で、入院期間は3週間を超えると告知された。家人の暗澹たる顔を見て「これは大変なことになってしまったな」というのが偽らない気持ちだった。

退職して20年近く経ち、患者になってみると、診療の進め方もだいぶ変わっており、驚きの連続だった。患者や家族への疾患の告知に始まり、治療の進め方、それに伴う危険や副障害について実際にはほとんど起こることのないようなもので、こと細かく説明があり、一般の人は治療を拒否するのではないかと思うほどであった。比較的大きな手術のため、術前に中心静脈に留置カテーテルを入れることになり、20年前は盲目的に鎖骨下静脈経由で行っていたが、今回は超音波とX線の透視下、頸静脈経由で処置された。7時間の手術の後、ICUに1日お世話になり、一般病棟に戻った翌日から、理学療法士によるリハビリテーションが始まり、体力が低下していることを自覚したのも驚きの一つであった。3週間の入院予定が術後10日目に退院許可が下りた。治療に携わった市立病院の皆様に心からの感謝をささげたい。

4月30日、術後1回目の外来を受診。摘出物病理検査の説明があり、摘出物が早期腺がんであり、断端にもがんはなく、摘出したリンパ節にも転移はなく腫瘍が完全に摘出されたこと、化学療法などの後療法は全く必要がないと説明された。

まもなく術後6か月になり、体調は術前とほぼ同様の状態になりつつあり、きよくりで何とか仕事を続けている。ご心配いただいた皆様方に深謝して闘病記とする。

私のオフタイム ～心とからだ求めるもの～

看護師主任 早坂 恵

数年前から気になっていたものに昨年の夏、ついに挑戦することが出来ました。SUP(スタンドアップパドルボード)です。サーフボードの上に立ち、1本のパドルで漕いで水面を進むウォータースポーツです。漕いで進むことも楽しいのですが、ボードの上に座ったり寝転んだりするだけで心地よいのです。昨年あまりにも楽しかったので、今年も雨の中でSUPをしてきました。マスクを外して水面に漂っていると、自然の一部になれたような気分になります。心から癒された時間になりました。



潟沼にて

臨時休診

年末年始のお休みは決まり次第、HPに掲載いたしますので、ご確認ください。

編集後記

暑さ寒さも彼岸までというように、秋分の日を境に一気に秋の風を感じるようになりました。もう今年最後のきよくりNEWSです。今年はコロナに翻弄された一年でした。来年は心穏やかな一年になることを願います。

発行元：村口きよ女性クリニック
<http://www.muraguchikiyo-wclinic.or.jp>
 e-mail: con@muraguchikiyo-wclinic.or.jp

